

令和5年度 研究紀要



東京都奉仕・ボランティア教育研究会

目 次

研究紀要の発行にあたって	1
令和5年度東京都教育委員会研究推進団体 研究計画書	2
ボランティア活動に関する情報交換会	3
《事例発表1》「葛飾区における ボランティア・福祉教育活動推進について」 葛飾区社会福祉協議会 石川 克巳 氏 《事例発表2》「外部活動の探し方・つながりの作り方（新規活動のポイント）」 東京都立稔ヶ丘高等学校 石黒 康 氏 《ボランティア活動に関する情報交換会 報告》 ※TVACニュース	
防災教育に関する研修会報告	14
講師 元宮城県立石巻西高等学校校長 齋藤 幸男 氏	
【情報提供】 東京都社会福祉協議会東京都福祉人材センター	15
東京都・東京都つながり創生財団	17
東京都奉仕・ボランティア教育研究会会員名簿	

研究紀要の発行にあたって

東京都立田無高等学校
校長 藤田 豊

東京都奉仕・ボランティア教育研究会は、平成 23 年度に発足し、高校生を中心とした、若者のボランティア活動等を推進するために、都立学校の教員を中心として、大学教員、社会福祉協議会、市民活動支援センター、青少年の活動を支援する N P O 団体、関係行政機関など幅広い方々と共に、研究を進めています。

今年度（令和 5 年度）は、新型コロナウイルスに関する扱いも変わり、社会と関わる活動等を再開している学校もある一方で、これまでの連携先との関係をつかめず、活動の開始や再開がなかなか見込めないという学校もあります。ボランティアセンターなどの中間支援組織や、活動場所となる N P O 団体や様々な施設も同じように、活動の開始や再開のきっかけをつかめずにいることもあります。

そこで、本研究会は、高校生の社会に関わる活動を推進するにあたり、高校生に関わる関係機関の大人たちが、緩やかな関係を築くことや、関係する機関へつながるきっかけや手順をつかみ、それぞれの立場で一步踏み出すことを願い、ボランティア活動等の社会とかかわる活動を推進する先生方同士や、都内ボランティアセンター職員との情報交換会を 8 月に実施しました。

また、12 月には、東北大学非常勤講師で元宮城県立石巻西高等学校長の齋藤幸男先生をお招きし、災害を通して感じた高校生とボランティア活動についての講演を実施しました。

令和 6 年 1 月 1 日には能登半島を中心とする大きな地震が発生しました。被害に遭われた方々にお見舞いを申し上げます。3 月に入ってもなお、インフラの復旧が進まない状況などもあり、災害とどのように向き合うのか、災間（災害と災害の間）にどのようなことを行えばよいのか、教員として高校生に何を語るのか、教員一人一人が考えているところです。

所属高校のこととなってしまう恐縮ですが、1 月中旬に、西東京市の職員の方々と共に、夕方の 1 時間、学校最寄り駅の田無駅の駅頭において、募金活動をさせていただきました。当初は、生徒会執行部の 6 名が参加予定でしたが、柔道部の生徒や、硬式テニス部の生徒も合流し、総勢 33 名の生徒が駅頭に立ちました。柔道部のマネージャーは自作の募金箱を作り、硬式テニス部の生徒たちは部活動帰りの駅で田無高校の生徒が募金活動をしていることを知り、やるしかないでしょと急遽合流しました。生徒たちは、様々な報道などを受け、自分たちも何かしたいと思いつつ、どうしていいのかわからない。そのような時に、周囲の大人が活動する機会を見せることで、生徒たちが一步踏み出すのだなと改めて感じました。



学校のひとコマ
(都立田無高校 Web ページ)

本研究会は、今後も、高校生が社会と関わる活動を始めることや継続するために、どのような仕掛けをつくることができるのか、研究してまいりたいと考えています。興味関心がある方々は、ぜひ事務局にご連絡ください。今後とも、本研究会へのご指導をよろしくお願いいたします。

(別紙様式2)

令和5年度 研究実績報告書

番号	087	研究団体名	東京都奉仕・ボランティア教育研究会
----	-----	-------	-------------------

研究のテーマ	生徒が主体的に行う社会に関わる活動について
研究の主な内容	<ul style="list-style-type: none">・コロナ過で生まれた新たな社会に関わる活動を探る →アンケートや社会福祉協議会等へのヒアリング・社会貢献活動による生徒への効果（変容等）をみとる・コロナ後を見据えた新たな社会に関わる活動を探る

回	実施日	研究会時間	内容	会場	備考
1	5月12日 (金)	16時00分から 17時00分まで	・今年度の連絡先等の確認 ・今年度の研究等の進め方	オンライン	
2	6月19日 (月)	16時00分から 17時00分まで	・研究主題についての意見交換 ・今後の研究会の開催日の検討	オンライン	
3	7月25日 (火)	15時00分から 17時00分まで	・研修会の進行について ・研究主題についての意見交換	向丘高校	
4	8月21日 (月)	13時30分から 16時30分まで	ボランティア活動に関する 意見交換会	東京ボランティア・市 民活動センター	
5	10月17日 (火)	15時30分から 17時00分まで	・研修会の報告 ・研究紀要についての意見交換	田無高校	
6	12月7日 (木)	時 分から 時 分まで	・防災に関する講演	田無高校	講師：齋藤幸雄氏
7	2月未定 ()	時 分から 時 分まで	研究紀要について		
8	3月未定 ()	時 分から 時 分まで	今年度のまとめ 次年度の活動計画		
9	月 日 ()	時 分から 時 分まで			
10	月 日 ()	時 分から 時 分まで			
11	月 日 ()	時 分から 時 分まで			
12	月 日 ()	時 分から 時 分まで			

ボランティア活動に関する 情報交換会



8月21日(月) 13:30 ~ 16:30

時程

13:30 挨拶・趣旨説明
13:40 事例報告
14:40 休憩
14:50 情報交換
16:05 全体共有
16:20 まとめ

<都立学校・公立学校の先生方>
若手教員育成研修1年次(初任者)
研修の課題別研修、中堅教諭等資
質向上研修の選択研修の対象にな
ります。

会場

東京ボランティア・市民活動センター

問合せ

東京都立赤羽北桜高等学校 研究会事務局 正木 成昭
東京ボランティア・市民活動センター 榎本 朝美

主催：東京都奉仕・ボランティア教育研究会
〒115-0056 東京都北区西が丘3の14の20
(東京都立赤羽北桜高等学校内) TEL 03-5948-4398
共催：東京ボランティア・市民活動センター
TEL 03-3235-1171



お申し込みはこちら

《事例発表1》

「葛飾区における ボランティア・福祉教育活動推進について」

葛飾区社会福祉協議会 石川 克巳 氏

本発表では、

- 1 令和4年度の取り組み
- 2 令和5年度の取り組み
- 3 ボランティア・地域貢献活動センターとは

の3本の柱で報告を頂いた。

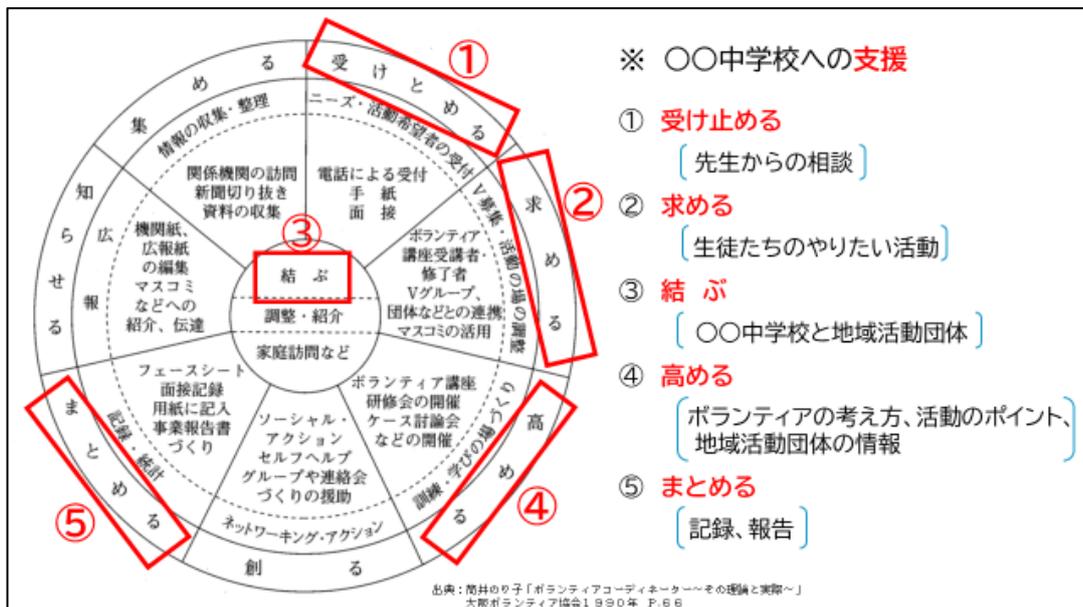
1の事例では、コロナ禍の行動制限がある中で、ボランティア活動がなかなかできないボランティア部のある中学校からの相談がきっかけで、石川氏自らが中学校に赴き、ボランティア活動の講話や体験活動の事前指導を行い、地域ぐるみの環境美化活動につなげていくものであった。その後も、事後活動として、その活動を主で行う団体との交流会を仕掛け、最終的に学内の学芸発表会で全校生徒に向けて取り組みを発表するなど、1年を通して生徒の変容を見とれる優れた事例報告であった。

2の取り組みとしては、こちらもある学校の先生から、「ボランティア部は他校と交流する機会がない。どうにかできないものか。」という相談を叶えるべく、葛飾区内ボランティア部を設置している中学校・高等学校9校の交流会を3月に計画をしているとのことであった。

1及び2の事例報告に共通することは、教員の困りごとやアイデアを形にする、石川氏のコーディネート力である。学校のニーズをどのようにデザインしていくかのノウハウは、社会福祉協議会やボランティアセンターに相談することで解決する代表的なものであった。

3の報告では、主な事業内容として、相談・情報提供、活動支援、講座・研修、福祉教育、災害支援、貸し出しのカテゴリの紹介があった。地域福祉の根幹を担う重要な役割を果たす機関であることを改めて実感することができた発表であった。

※ ボランティアセンターの機能を学校からのニーズに落とし込んだ図（当日の投影資料から）



《事例発表2》

「外部活動の探し方・つながりの作り方（新規活動のポイント）」

東京都立稔ヶ丘高等学校 石黒 康 氏

石黒氏の発表では、最初にご自身が2004年から地元中学校の生徒と地域のお祭りボランティア活動を行ったことで、ボランティア活動に関する意識が芽生えたことから報告に移っていった。教員自らが、社会貢献活動を行うことで、生徒にどのように還元していくかをデザインするきっかけになると感じる内容であった。

実際に、現職校でボランティア部を立ち上げ、区、児童館、町会、小学校PTAと連携を深め活動の幅を増やしていった。中でも、児童館、町会との連携のポイントの紹介では、児童館では、高校生までが対象であるため、中高生のボランティアを広く受け入れてくれていることを知った。また、町会では、高齢化が1つの社会問題化となっていることから、高校生は歓迎されるのこを理解した。特に、児童館の活動は当初1人の生徒が定期的にボランティア活動を行っていて、イベントに必要な人数を集めてもらえないかという職員からの要望で、広まった活動とのことであった。この児童館での活動がきっかけで「あの高校の生徒は一生懸命ボランティア活動を行ってくれる」という口コミが区内の児童館に広がり、今では複数の児童館のお祭りに参加するまでに至っているとのことであった。この事例では、横のつながりが活動の幅を広げる具体例であるということに改めて認識できたものであった。

また、稔ヶ丘高校では、ボランティア活動を単位認定にしていることから、地域ボランティア情報コーナーを設け、興味・関心のある生徒の受付を随時行っているとのことであった。その事前の準備や生徒の申し込み方法、引率教員のマニュアルなどの話もあり、とても丁寧に対応を行っている印象をもった。

最後に、ボランティア部の活動報告もあり、平日はエコキャップ運動、街頭募金活動、手作りマスク活動、学校PRスタッフなど数多くの活動を行っていることが印象的な発表であった。

《会の様子》



石川氏の事例報告



石黒氏の事例報告

《ボランティア活動に関する情報交換会 報告》

新型コロナウイルス感染症が5類に移行し、今まで制限のあった活動が徐々に元の状況に戻っていく中で、今まで連携のあった関係機関から「ボランティアの依頼が来なくなってしまった」、「連携していた施設での連携の再開が断られてしまった」など、コロナ以前の社会貢献活動が出来なくなっているという話を受け、中学・高校・特別支援学校の先生、中間支援組織であるボランティアセンター等を一同に会した情報交換会の場を設定した。

(なお、各グループのまとめは、各グループ内の研究会メンバーからの資料に基づき行っている)

情報交換会での各グループのまとめ

< 1 班 >

高等学校教員 3名

中間支援組織 2名

記録・事務局 1名 (大東先生)

- ・高等学校教員の高校で行われているボランティアを紹介し合った。
「人間と社会」の授業として、看護師・保育士・介護士等のインターンシップとして、ボランティアへの興味としてと、入口は様々であるが、ボランティアで世界が広がる。
- ・中間支援組織。識者及び地域の方々によるボランティアの意義についての説明の事前活動、振り返りをきちんと行う事後活動、活動中の感謝の一言、環境づくり(適切な人員・活動量・用具等の準備等)、事後の活動紹介等の仕掛けが、生徒のボランティア継続につながるのではないかと。
- ・中間支援組織から学校に資料が送付されてくるが、クラス数分あるとクラス掲示で呼び掛けることができ、効果も高いと思われる。
- ・中間支援組織の発行物やWebページには様々なボランティアが紹介されており、生徒・教員が興味・関心をもったボランティアに参加するとより楽しいのでは。
- ・若手教員は、教職課程の中で、ボランティアを経験している。
- ・学校の教育活動に位置づけられていると保険は出る。中間支援組織主催のボランティアにおける参加者の保険の仕組みについて教えていただいた。

< 2 班 >

高等学校教員 2名

中間支援組織 3名

2班は、それぞれの立場から、現在抱えている課題について共有し、ざっくばらんに多方面から対策を考えた。

学校側の課題は、生徒の意識をいかにボランティアに向かせるかということと、やはり連携先とどのように繋がったらいいかということであった。教員2名のうち、1名は管理職で後の1名は今年度新規採用の教員であるが、彼は、生徒にボランティア活動に興味を持たせて、体験による自己肯定感や自信をつけさせたいという、大きな目標を持っており、管理職も中間支援組織のメンバーも、何とか力になりたいと様々な意見が出たが、話し合いの中で、ボランティア活動の持つ意味についても考える場面があった。例えば、ボランティアグループVIOLET!の活動を紹介して、興味を持った生徒が見学に来る、活動に参加する、それだけでは生涯にわたってボランティア活動に取り組む意識が根付くか?しかし、点

字を習得することが、微力ではあっても点字翻訳に関わり、目に不自由な方の力になれるという意識を持って取り組めば、生涯その活動に係わることができるのではないかと考えた。つまり、ボランティア活動において何が重要かということ、生徒が理解した上で関わることで、意識も変わるのではないかと考えた（当たり前なことだが改めて考えさせられた）。

また、中間支援組織からは、学校の対応に苦慮しているという話が合った。チラシや案内を送付しても果たして読んでもらえているのか、と心配されていたし、担当が替わるとやはり対応が大きく変わるため、なかなか継続して皮割ることが難しいとのこと（特にコロナ禍を挟んだこともあり）。都立高校にはボランティアサポートチームが必置である、とお伝えして、それを活用していただくことを提案した。今回の情報交換会に参加すると、今まで知らなかった各部署の活動を知ることができるだけでなく、ボランティア活動を始めるきっかけやヒントをもらえたり、他校の取組や多くの方の経験を聞くことができ、参加したみなさんが、こんなに多くのサポートしてくれる仲間がいることを知って、よし、もう少し頑張ってみよう、という気持ちを持ったことは大きな収穫だったと思う。

< 3班 >

高校教員 2名
特別支援学校教員 1名
中間支援組織 2名

- ①高校教員1名が奉仕ボランティア教育に精通している印象だった。学校をあげて奉仕活動を推進していて、NPO法人や近隣の自治会、特別支援学校等と連携した活動に熱心に励んでいる、とご報告してくださいました。
- ②特別支援学校の教員は、新規採用者という立場であったが、特別支援学校の生徒も参加できる奉仕活動を模索している様子で、当該教員は保健体育科で、例えばボッチャを他校の生徒や地域に住民へ教える機会を設けられたら、というご発言があった。但し、登校日は他校の生徒となると、時程が合わないのでは？と懸念していた。他にも、ボッチャの競技ルールをそのまま適用するのではなく、参加者の実態に合わせたローカルルールを設けると、楽しくボッチャに参加できると思う、ということもおっしゃっていた。
- ③中間支援組織からは、コロナ禍で全ての活動が止まってしまったが、昨年あたりから対面での奉仕活動を各校、地域で行われるようになってきた。もっともっと奉仕の精神を広めていきたいと考えている、というご発言があった。
- ④ほかには、毎日登校している学校や生徒については奉仕活動を推奨しやすいが、登校がままならない生徒にやらせようと思っても声掛けがなかなか難しい。奉仕活動のきっかけは、授業や学校でやらされる奉仕活動であっても、そこを切り口に自らが奉仕活動に参加していく生徒もそれなりにいるようだ、などと様々な意見交換が出来たと思う。
- ⑤公立学校の場合は、教員の異動により様々な課題が生じる。誰が着任しても地域や周辺の学校などと連携した奉仕活動が出来る環境整備が必要だという考えも出た。

< 4 班 >

高等学校教員 3名

中間支援組織 3名

4班は、それぞれの悩みについて書き出してもらい、それについて1つずつ協議した。

その中で、特に印象的でありかつ活発に意見交換がされた内容を紹介する。

高等学校からは、生徒がボランティア活動を行いたいといっても、多様な地域から生徒が通っているため、どのように地域のボランティアに参加させるべきか、生徒が希望するボランティアをどのように叶えるかといった悩みがあった。一方、中間支援組織（社会福祉協議会）から小学校・中学校・高等学校の児童生徒を対象としたボランティアがあった場合、突然、学校に連絡して良いものかどうか悩んでしまう。その際に、ボランティア部の先生と話した場合、そのような部活動が無い場合もあるので、依頼ができない状況である。このことから、双方の悩みを上手にマッチングすることで、新たな連携が生まれてくるのではないかと考えた。

高等学校からの悩みを解消できるアイデアとして、地域の枠を超えるが生徒が行いたいと思っている活動にマッチングできる団体の情報をもっている中間支援組織の方からこのような団体があるといった具体的な情報提供があったり、ある高等学校が昨年度から行っているオンラインの交流会で一緒に関わっていったり、リアルの場合もあるお祭りに一緒に参加をしたり協働の機会の提供もあった。活動の一步を踏み出すことに悩んでいる場合には、このように交流できた学校や中間支援組織のネットワークを上手に活用し、次の活動に活かしていく方法もあると考えた。

中間支援組織からの悩みとしては、DMを小学校・中学校・高等学校に送付する。その際に、校長宛の下に、総合的な学習（探究）の時間担当者、ボランティア教育担当者、生徒会担当者などといった、具体的な担当者名を表記して発送してみてもどうかといった声があった。また、DMが送られてきても実際に連絡していいのかが迷ってしまうといった高等学校の意見もあり、それを解消するために、直接、連絡してもらった方が学校としてはありがたいといった声があった。中間支援組織と学校をつなぐキーポイントは、対話であると実感した。

DMに興味をもった学校も関係機関にすすんで連絡をとり対話していくこと、中間支援組織も学校に依頼を検討した際には、すすんで学校に連絡をとり対話をしていくことで関係が生まれてくるということを改めて実感した場であった。

< 5 班 >

高等学校教員 2名

中間支援組織 2名

行政職員 1名

※箇条書きにてまとめています

【先生から中間支援に思うこと】

- ・どんな活動や体験があるのかわかると嬉しい

【中間支援から先生に思うこと】

- ・先生が思う「良い」ボランティアや「安全な」ボランティアとは何だろうか？
- 宗教の勧誘など、生徒がトラブルに巻き込まれることが心配なのかもしれない
- ・急に、〇月〇日に「何か」お願いします！と言われる時があるけれど、先生と中身を相談して決められると嬉しい。

- ・メニューがあると、食べる人(参加者)にはなれるけれど、そのあと作る人(主体的な活動者)になりにくいところがある。

【先生同士で高める】

- ・温暖化や保護犬など生徒が興味のある種はある。それをどうするか
- ・中高生のボランティアグループ VIOLET!!では、何を学びたいのかの意見出しをやって活動を決めているとのこと。先生たちも、何を伝えたいのか意見出しをやったら、整理できるのかもしれない。
- ・他の先生にもボランティアに興味関心を持ってもらって、良さを知ってもらいたい。
- ・先生がボランティアを知らないと、子供たちに届けられていない。探究やボラ部の先生だけが悩んでいる状況。
- ・先生属人的になりがち。意欲のある先生が異動したあとに続かない

【ボランティアが第三の居場所に】

- ・(生徒にとって)最近では近所の知らないおじさんおばさんに怒られたりする経験がない。ボランティア先に続けて行くうちにいろいろな大人に会って第三の居場所になっていくのでは。
- ・(生徒にとって)同じ活動先に続けて行くことで、そこで出会った大人に、学校では言えない悩みを相談していることもある。
- ・アウェイな場所で人と触れ合う機会は、生徒の成長につながっている。
- ・地域の人との関わりに積極的な先生は少ない状況。安心感をもって地域に相談できる関係ができれば。
- ・活動に引率するかは迷うところ。体調不良などの場合にすぐに駆け付けられる場所での活動の場合は、あえてついていかないほうが、生徒が力を発揮していることも。

【最近の生徒を見ていて思うこと】

- ・自己有用感が低い。自信がなく、みんなの前で褒められるのも嫌がる。自信を持たせたい。
- ・調査書のためのボランティア
- ・オープンキャンパスに保護者も行く。一人で行かない。
- ・生徒からわざわざ言ってこないで、ボランティア活動している子を拾えていないところもあるかもしれない。

< 6 班 >

高等学校教員 2人

中間支援組織 2人

その他 1人

6班は、若手の都立高等学校教員2人(教員①と教員②とする。)の悩みに乗る形で情報交換した。

教員①は、担任しているクラスに「保護猫ボランティア」の活動を行いたがっている生徒がいて、現在、その生徒はTVACに参加している。

しかし、その生徒から学校にボランティア部を作ってほしいと言われ、職員会議に提案したら、今でさえ部活動の指導体制の確保ができていないのにと、猛反発を受けたそうである。

教員②も、担任しているクラスにボランティア活動をしたいという生徒がいるが、何をしたらいいのかがはっきりしていない。

やはり、ボランティア部を作ってほしいと言われているが、どうしていいのかが分からない。

中間支援団体から、現在の学校の働き方改革がどのように影響しているのかについて質問があり、情報交換する中で、新たなことを始めることができにくい状況にあるということ共有した。

生徒が新たにボランティア活動を行うには、教員が教育活動以外で生徒のボランティア活動に関わることは限界があるため、外部団体につなぐまで関わりとするか、でなければボランティア活動を行う組織を校内に作るかのどちらかになっていく。

外部団体につなぐには、「保護猫ボランティア」と活動したい内容が決まっているのであれば、そこを取り掛かりとしていくのが良いのであろうし、各地域で「保護猫ボランティア」の活動をしている団体は、犬猫病院に行けばポスターが貼ってあるから、そこから広げていくことができるだろう。

一方、やりたいボランティア活動が決まっていないのであれば、自分に適したボランティア活動を見つけるチャート図のようなものがあるので、そのようなものをやった上で、各地域のボランティアセンター等に相談に行くのもよいであろう。

生徒自身が、活動に何を求めているのかを聞くことも重要だし、活動する中で、それが明確になっていくこともある。

これに対し、学校の中で新たな組織を作り、活動を始めることについては、年々難しくなっている。そのような中でも周りに働きかけることが重要という意見もあった。

とは言え、関連する分掌を担当していなければ、若手教員から学校全体に発信していくこと難しい。管理職や主幹教諭などベテランの教員に相談して、委員会活動とか既存の組織を活用することを検討してはどうかという意見も出された。

高校生が、ボランティア活動をすることに教員が関わるには、個人の熱意や努力だけでなく、周囲の応援も重要である。

このことから当研究会のような集まりに関わってくれば、みんなでも応援していけるという結論で、情報交換は終わった。

< 7 班 >

高等学校教員 2名

中間支援組織 2名

全日制普通科勤務で初任者の方の参加があったため、今困っていることを初任者から出していただき、「初めて学校でボランティア活動に担当として取り組むには」という視点で会を進めました。

①家庭科の授業の一環で保育実習を実施している。授業でのボランティア活動から、生徒が自主的にやろうという動きになるためには？

⇒⇒ 担当分掌が生徒部ならば、「生徒会」を動かしてみる。生徒は中学校で地域のイベントに参加した経験があるかと思う。地域の〇〇ボランティアセンターに連絡をとり連携をしていく。校内環境整備をし、外部との連携が大事である。大切なことは、参加生徒には、自主的な活動をさせ、ほめること。その際、ほめた理由を明確にすること。事前指導を徹底し「あいさつが大事であること」を伝える。キーワードは「ほめること」。ほめることは「やってみたい」につながり、生徒の自主的な活動に繋がっていく。

②ボランティア活動を広げるために、生徒が変われるのは？

⇒⇒ ボランティア活動は、一人の先生から始まる。生徒との出会い、気づきがあり、生徒が変容していく。キーワードは「先生への広がり」。職場の中で味方を増やしていく。外部機関（今日参加していただいている中間支援組織）の味方を増やしていく。

「生徒の変容」を目の当たりにした一般の先生方の気づきが、学校を変える。

その他の話題の紹介です。

③総合的な探究の時間で、3年生の個別の論文指導が上手くいかない。どうすれば良いのか。美容師、動物関係といっても体験学習の経験がなく、ネット検索で論文を書いている現状がある。

⇒⇒ 今というより、もし、学年を初めてもったら、その学年をどう育てるかということで考えてみたい。生徒から希望を取り、職種別に体験学習ができるガイダンスを企画する。先生が進路指導部、教務部、学年と連携を取り、自分で全て企画するのは王道ではあるが、外部機関を頼って、企画を進めるのも良いと思う。

学年の生徒全員にフィールドワークに行かせる。地域の場所や地域の方々と触れ合うという体験から得られるものは大変大きい。

④生徒個人が取り組むボランティア活動が進んでいない。

⇒⇒ ○○地区学校防災活動拠点訓練（地域と連携した防災訓練及び避難所設営・運営訓練）として、地域住民と1学年が、小学校、中学校、高校をフィールドに実施している。しかし、活動といっても、学校（先生）が準備したボランティア活動である。生徒が自主的に参加するボランティア活動に広げていくことが今後の課題である。

☆多今回の情報交換会で、ボランティア活動の原点に立ち返り、基盤づくりの大切さと大変さを学ばせていただきました。新しい世代に引き継がれ、繋がっていくことを大切にしたいと思いました。

《グループ活動の様子》



※中間支援組織からの情報提供のあと、各グループで意見交換を行いました

簡単ガイド (障がいのある方、ネットに不慣れの方などに)

会議室等空き状況

Language

やさしいにほんご サイトへ

初めてのボランティア ご利用案内 アクセス&コンタクト



サイト内検索

検索

トップ / ニュース一覧 / TVACレポート / 記事詳細

TVACニュース

(2023年10月4日 / 市民学習担当)

TVACレポート

都内中学校、高等学校、高等部の教員とのボランティア活動に関する情報交換会

キーワード

今回、東京都奉仕・ボランティア教育研究会主催、東京ボランティア・市民活動センター共催で、「ボランティア活動に関する情報交換会」を実施しました。

都立・私立高等学校の教員や、社会福祉協議会・ボランティアセンターなどの中間支援組織スタッフ、行政職員も含めて42名の方の参加がありました。

高等学校の視点での地域との連携の事例、ボランティアセンターの視点での学校と地域を結びつける事例発表や、中間支援組織からの情報提供、参加者同士の意見交換など多岐にわたる会となりました。

ボランティア部活動や福祉教育・ボランティア学習の推進を考える先生方と、ボランティア・市民活動センターの連携のきっかけともなりました。

『ボランティア活動に関する情報交換会』

- 1 日時 令和5年8月21日(月)13:30~16:30
- 2 会場 東京ボランティア・市民活動センター会議室AB
- 3 内容
 - 司会:東京都立赤羽北桜高等学校 正木 成昭 さん
 - 1 挨拶(趣旨説明) 奉仕・ボランティア教育研究会会長・東京都立田無高等学校 藤田 豊 さん
 - 2 事例報告1 東京都立穂ヶ丘高等学校 主幹教諭 石黒 康 さん
 - 3 事例報告2 葛飾区社会福祉協議会 ボランティア・地域貢献活動センター所長 石川 克己 さん
 - 4 情報提供
 - 東京ボランティア・市民活動センター
 - 東京ボランティアレガシーネットワーク
 - 東京都社会福祉協議会 東京都福祉人材センター
 - さわやか青少年センター
 - 5 情報交換会
 - グループに分かれての情報交換
 - 6 全体共有
 - 7 まとめ

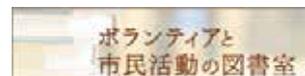
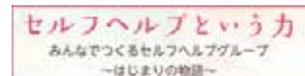
TVACニュース一覧

お知らせ	>
レポート	>
情報誌ネットワーク	>
講座	>

情報を探す

<	2023年10月							>
日	月	火	水	木	金	土		
1	2	3	4	5	6	7		
8	9	10	11	12	13	14		
15	16	17	18	19	20	21		
22	23	24	25	26	27	28		
29	30	31						

- TVACについて・ご利用案内
- 初めてのボランティア
- ボランティア保険・行事保険





情報交換では、中間支援組織ができることのヒントもいただきました。

例えば、学校にボランティア募集のお知らせなど資料を送る場合に、クラス分の枚数があるとクラス掲示で呼びかけることができ効果があるかもしれません。

また、校長宛のほか、「総合的な学習(探究の時間)担当者、ボランティア教育担当者、生徒会担当者など具体的な担当者名を入れて発送すると、見てもらえる可能性が高くなりそうです。

すずんで学校に連絡し、対話していくことで関係ができると感じました。関係性ができれば、都立高校ではTeamsのアプリで情報提供をしている学校もあるとのこと、紙のチラシに加えてデータでの情報提供もできるとよいと感じました。

学校のなかで新たにボランティア部を立ち上げたり、活動を始めることは年々難しくなっている状況もあるようです。そのようななかでも、ボランティア体験により、生徒の自己肯定感や自信を育てたいと考えている先生や、事前学習・振り返り・体験先からの感謝を生徒に伝える・参加しやすい環境づくり等、生徒のボランティア継続のための土壌づくりに前向きな先生もいらっしゃいます。

生徒の思いを実現したいと思っても、教員個人の熱意だけでなく、周囲の支援も重要です。ボランティアセンターや地域のNPOを知らない先生方もまだまだいらっしゃるかと思いますので、中間支援からのアプローチと、先生が困ったときやわからないときに、地域の頼れる先としての関係づくりが必要だと感じました。

奉仕・ボランティア教育研究会 とは

東京都教育委員会より認定を受け、平成23年度より発足し、10年以上活動を行っている研究団体です。主に、学校におけるボランティア学習・ボランティア教育、福祉教育全般に関わる調査・研究をしています。詳細は研究紀要等にまとめてありますので、研究会のWebをご覧ください(<http://www.houshibora.com>)。

ツイート

ページトップへ

TVACとは？

ボランティア・NPOを知る

このサイトについて

リンク・著作権について

情報を探す

特設コンテンツ

個人情報の取り扱いについて

アクセス&コンタクト

東京ボランティア・市民活動センター

TVAC Tokyo Voluntary Action Center

〒162-0823 東京都新宿区神楽河岸1-1 セントラルプラザ10階
電話: 03-3235-1171 (代表) / ファックス: 03-3235-0050
お問い合わせはこちら
取材申し込みはこちら

このサイトの著作権はすべて東京ボランティア・市民活動センターにあります。無断複製・転載を禁じます。

copyright 1998-2017 Tokyo Voluntary Action Center.

《防災教育に関する研修会 報告》

12月7日（木）実施

都立田無高等学校にて、東北大学非常勤講師の齋藤幸男先生をお招きし、防災教育に関する講演を頂いた。齋藤先生は、2011年3月11日の東日本大震災発生時に宮城県石巻西高校の教頭として避難所運営にあたっており、当時の石巻西高校は正式な指定避難所ではなかったが、人道的な立場から教職員だけで44日間の避難所運営を行った。体育館は遺体仮安置所・検視所となり、校舎を開放して地域住民の避難生活を支援した。さらに、11名の生徒が震災の犠牲になるなかで、教職員は生徒に寄り添い続け、生徒はともに支え合いながら学校の教育活動を再開していった。2012年に同校の校長になり、2015年に退職。全国各地を講演や教員研修などで飛び回り、震災の教訓を語り継ぐ活動を通して「いのちと向き合う教育」の大切さを訴えている。

本講演では、震災当時の混乱した状況の最中、(高校生を含む)子どもから齋藤先生自身が勇気づけられ、励まされたことが紹介された。また、子どもたちが考える避難所の運営図は大人が考える行政の組織図のような縦割りの組織ではなく、「ウェビング」(発想法の1つ)の考え方を採用されており、実際に震災直後の状況では縦割りではなく役割としての横のつながりが必要だということを子どもたちから学び、『正解ではなく成解』を求めていく姿勢が避難所運営には大切な視点であることが言及された。

東日本大震災後、都立南平高校の生徒のボランティアを受け入れた。そこでは高校生自身、何ができるかを考え、実行するだけでなく、地域のお年寄りの方々の専門的な知識を受けながら、地域の方々が高校生と共に自然に活動に参加していく様子が報告された。ボランティアはしてあげる姿勢だけでなく、ボランティアを通じて子どもたちが自身の役割を認識して、互いに有用性を感じることができる(「“あげる”から“もらう”へ)ということが講演の中でとても印象に残った。

「心の復興」という視点から、震災時、曖昧な喪失(“さよなら”のない別れ、別れのない“さよなら”)を経験した人は、震災から10年以上経過した現在でも、常にその課題と向き合っていると話された。また、その課題は被災地のみならず、現代社会において認識すべき課題であり、「心の復興」をしていくには、会話でなく対話を通じて、お互いの立場の違いを理解しあう必要があることが触れられた。

今回の講演を受け、防災教育では、防災・減災のみならず、震災からの復興という視点から高校生がどのように関わっていくべきかを考えさせられた。今後、現地を訪問する生徒たちや防災の切り口で学ぶ生徒たちに、何を身につけてもらうのかを研究会等を通じて考えていきたい。

講演のあとは、グループによる意見交換の時間を設け、参加者同士で防災教育等に関する各校の取組や講師の先生に対する質問などがあった。

《講演の様子》



会長挨拶



齋藤先生講演



意見交換

これからの福祉を担う次世代の若い方に対して、福祉の仕事の魅力や現状を伝え、興味をもっていたくための「すそ野を広げる取り組み」として、以下の事業をご案内させていただきました。

フクシを知ろう！なんでもセミナー



都内の中学・高校を対象に、東京都福祉人材センター職員や福祉現場で働く職員が福祉の仕事やその魅力についてわかりやすくお伝えする、学校訪問型セミナー。

家庭科、生活と福祉、キャリア教育、道徳、人間と社会、総合的な学習（探求）の時間など、様々な場面で各校のご要望に沿ったセミナーを実施。

フクシを知ろう！教員向けセミナー



東京都内の小学校・中学校・高等学校の先生方を対象に、福祉・介護の仕事に対して理解を深めていただき、学校の授業等においてご活用いただける教員向けセミナーを開催。

第一回：令和5年8月18日（金）15：00-16：45
※オンライン開催（後日録画配信）

第二回：令和5年12月15日（金）-令和6年1月14日（日）
※上記期間中、動画配信により実施

フクシを知ろう！おしごと体験



都内在住または在学の小学生、中学生、高校生を対象に、夏休みの期間中に、福祉施設における職場体験を実施。

実施期間：令和5年7月21日（金）～8月31日（木）
※体験は1人1回（半日）

募集定員：150名

福祉に関する授業等で使える資料のご紹介



東京都社会福祉協議会ホームページに福祉に関する授業や進路指導に役立つ素材を公開。

東京都と(公財)東京都つながり創生財団は、東京2020大会レガシーを活かしながら、
ボランティアの活動継続やボランティア活動の裾野拡大に取り組んでいます。

東京ボランティアレガシーネットワーク (VLN) とは

令和3年11月にオープンした、**東京都の公式ボランティアポータルサイト**。東京都と(公財)東京都つながり創生財団が運営しています。
福祉・スポーツ・多文化共生等多様なボランティア情報を発信し、中高生を含め、**様々なボランティア活動を応援**していきます。



<https://www.tokyo-vln.jp/>

団体ユーザー【募集団体】

- 123の団体・組織 (2023年12月末時点)
- TVAC・日本財団ボラセンのほか、区市ボラセン、国際交流協会、国際協力NGO、都庁各局、区市町村、民間ボランティアグループ等、様々な分野の団体が登録し情報を発信。

個人ユーザー【活動希望者】

- 11,448人 (2023年12月末時点)
- 東京2020大会関連ボランティア経験者をはじめ、スポーツや国際分野、公益事業に関心の高い方などが登録。

ユーザー登録者以外も…

- 読み物記事「知る・学ぶ」を中心に非登録ユーザーも多く閲覧。
- 月間平均PV 75,000以上。
- LINEやX (旧Twitter) を活用し、定期的に情報発信。

- ボランティア・イベント・セミナー・寄付など幅広い募集情報に加え、**ボランティアの魅力がわかる読み物を多数掲載**しています。
- ボランティアに参加した方の**リアルな体験談、運営する団体の活動レポートを読むことができます。**
- ユーザー登録すると、**体験談の投稿や、サイト上での情報交換、交流会への参加**など、より楽しくVLNを利用いただけます。こうした取組を通じ、ユーザーの**交流の活性化やモチベーション向上**を図っています。

VLNでは、「東京ユースボランティア」の終了も踏まえ、

中学生に向けた情報も積極的に発信しています！

中学生に向けたVLNの取組 (R5年度)

読み物記事の掲載

夏休みや課外活動等において中学生がボランティアをはじめめるきっかけとして、また活動を行う際の参考として活用いただけるよう、中学生向けの記事を公開しました。

◆ 中学生・高校生が参加できるボランティア

夏休みにも気軽に参加できるボランティア活動や、活動の探し方を紹介



<https://www.tokyo-vln.jp/learn/firststep/130479>

◆ 中学生のボランティアグループ「VIOLET!!」とは？ 1年間の集大成となるイベントに密着

都内の中学・高校の生徒が交流しながら活動しているボランティアグループ「VIOLET!!」の取組を紹介



<https://www.tokyo-vln.jp/learn/firststep/121855>

学校への周知

都立学校のセンター長連絡会や校長会にて、VLNの案内を実施。また、VLNのポスターを都立学校等へ配布しました。

奉仕・ボランティア教育研究会の定例会・情報交換会に参加しVLNの取組紹介を行いました。研究会の活動や、部活動の取組の発信にもVLNを活用いただいています！



都民生活部では、ボランティアの活動継続や裾野拡大等を目的として、
ボランティアの多様な魅力を発信するイベントを実施しました

つながる!!Tokyoボランティアフェスタ2024

日程：2024年1月27日（土） 会場：東京国際フォーラム

内容

- ◆安河内哲也先生（予備校講師）による「やさしい英語」の特別授業、国際交流をテーマとした「やさしい英語のスピーチコンテスト」
- ◆植松隼人さん（デフサッカー指導者）によるデフリンピックトークショー
- ◆**スポーツ・国際交流・環境など幅広いボランティア団体等による出展ブース** など

＜出展団体例＞

東京都つながり創生財団、VIOLET!!、東京学芸大学附属国際中等教育学校、学生団体おりがみ、キッズドア、FC東京・スポーツボランティア、シャンティ国際ボランティア会、都庁部署（世界陸上・デフリンピック）等



出展ブースでは、学生のボランティアグループなど様々な団体に協力いただき、
来場者の皆様に活動内容やボランティアの魅力等を紹介いただきました

学生の出展団体

- ◆ **中高生のボランティアグループ「VIOLET!!」**
ボランティア活動を実施または関心のある学生が幅広く集まり、活動やイベントを企画実施
(事務局：東京ボランティア・市民活動センター)
- ◆ **東京学芸大学附属国際中等教育学校 ソーシャルアクションチーム**
「中高生が参画しやすい社会を創るために中高生のモデルとなる」をミッションに掲げ、地域活性化・人権・国際協力・環境など様々な分野で活動を実施
- ◆ **学生団体「おりがみ」**
「『おもしろそう』から始まる共生社会」を理念として掲げ、文化・環境・スポーツ・国際・福祉・教育の6分野から、「おもしろそう」なボランティアを大学生が創り出す



VIOLET!!



東京学芸大学附属国際中等教育学校
ソーシャルアクションチーム



学生団体「おりがみ」

令和5年度東京都奉仕・ボランティア教育研究会会員

役職等	氏名	所 属	備 考
会 長	藤 田 豊	東京都立田無高等学校	校長
副会長	石 井 久美子	東京都立向丘高等学校	副校長
	吉 田 寿 美	東京都立上野高等学校	統括校長
	富 川 麗 子	東京都立東村山高等学校	統括校長
	神 谷 画 歩	東京都立羽村高等学校	校長
	鯉 渕 健 太	東京都立小松川高等学校	
	櫻 井 滉 輔	東京都立三鷹中等教育学校	
	武 蔵 史 朗	東京都立赤羽北桜高等学校	
	佐々木 彬 人	東京都教職員センター	
	伏 見 明	都立学校教育部特別支援教育課	
	小城原 友 子	東京都立田園調布高等学校	
	村 田 陽 次	東京都生活文化スポーツ局都民生活部	
	戸 田 未 央	東京都生活文化スポーツ局都民生活部	
	佐々木 亜 弓	東京都生活文化スポーツ局都民生活部	
事務局長	正木 成 昭	東京都立赤羽北桜高等学校	
会計・監査	板 垣 慶 樹	東京都立荻窪高等学校	
大学関係者	大 東 貢 生	佛教大学社会学部	准教授
外部関係者	川 原 伸 也	(公財) 東京都つながり創生財団	
	石 川 克 巳	葛飾区ボランティア・地域貢献センター	所長
	羽毛田 優	東京都社会福祉協議会	
	榎 本 朝 美	東京ボランティア・市民活動センター	
	有 馬 正 史	認定NPO法人 さわやか青少年センター	理事長

